

現代史特集 日本の性産業と見えない当事者

特集の趣旨

現在を未来から振り返った時、はたしてこの時代を記述することができるのか、危惧する声がある。本誌も例外ではないが、かつては紙に印刷されていた情報は多くが電子データに置き換わり、電子データはみるからに脆弱である。占領期に売られた、質の悪いセンカ紙に印刷されたカストリ雑誌は、80年後の現在も残っているが、PDF ファイルが80年後に残っていることなど、現状では想像もできない。PDFですらない、個人サイトやブログの記事にいたっては、今後どのように保存されるのか/すべきなのか、誰にも見通しはないといえるだろう。このような現状のなか、さらに現在進行形で、特定の表現物や特定の人々の声の人知れずオンラインから見えなくされ、消去されているとしたら、どうなるだろうか。

本特集では、第一に、非規範的とされる性に関する現在進行形の表現規制を取り上げる。コンテンツクリエイターの雛奈子氏が具体的に語ってくださったように、コロナ禍以降、非規範的とされる性表現に対する規制は非常に厳しくなり、多くの表現が取り締まられている。問題は、表現規制そのものにとどまらず、その不可視性にある。過去の表現規制では、印刷物であれば発禁本が世に残るため、何がどのように規制されたのかを、後世の人間が不十分ながらも検証することが可能であった。しかしオンラインコンテンツの場合、「発禁」にされたものは削除されてしまうため、痕跡が全く残らない。現在の表現規制は、注意深く観察していない限り誰にも見えない形で、急速に進行しているのではないか。

加えて、2025年12月、ソーシャルメディアプラットフォーム X (旧 Twitter) で、風営法届出済の合法性風俗店や SM バーの公式アカウント、セックスワーカー個人の営業アカウントが大量に一齐凍結されるという出来事があった。その後も類似の凍結が定期的に発生している。これにより現在の X は、性産業従事者のかなりの数が排除された言論空間となっているが、このような排除の痕跡も、アカウント凍結という手段ではほとんど残らない。多くの人に気付かれぬまま、排除や差別が進行しているということが出来る。

もちろん X は民間企業が提供する一つのプラットフォームに過ぎない。しかし近年、SNS 上の世論が選挙結果にも影響を及ぼすとの指摘もある。国内ユーザー6,800万とされる X において形成される世論から、特定の属性の人々が排除されていることには、強

い危機感を抱かざるを得ない。「対談 コロナ禍の証言」は、このような問題意識に基づいて企画されたものであり、第一に、現在起きている表現規制・弾圧についての証言を記録することを目的としている。さらに、前述のような SNS からの性産業従事者の排除を受け、昨年 11 月に法務省で議論が開始された売春防止法改正問題についても、「当事者」の声を可視化し、記録することを試みた。

売春防止法改正問題とは、「北欧モデル」と呼ばれる買春者処罰の導入の是非をめぐる議論であり、本特集のインタビュー企画は、この問題をうけて立ち上げられた。「買春者」とは、現在の日本では違法とされる「売春」（膣ペニス性交）の相手方を指し、現状では性風俗店の利用者は含まれない。しかし、「売春」の範囲を口腔性交や肛門性交、性器への物の挿入などの性交類似行為にまで拡大すべきだという意見が、検討委員会で提示されたと報道されている。この拡大された定義を採用すれば、性風俗店利用者もまた「買春者」に含まれることになる。したがって本特集では、『買春者』とは誰なのか」と題して、SM クラブやその他の性風俗店の利用経験をもつ男性 2 名へのインタビューを掲載した。

現在、「買春者」は実態としては必ずしもそうではないにもかかわらず、「貧困層の未成年女性に金銭で性交を強いる男性」として一方的にイメージされ、強固にスティグマ化・悪魔化されている。買春処罰導入に反対する立場の人々でさえ、買春者はすべて「自らの性欲を満たすためだけに他者に苦痛を強いる者」といった認識を持っていることがあり「買春者を擁護する意図はない」と前置きされることも多い。

しかし、これは奇妙なことである。近年、セクシュアリティ研究は学問分野としてすっかり定着したが、それはつまり、性が学術的に意義のある研究対象だとみなされるようになったことを意味する。それはすなわち、他者との性的な親密関係が、単なる生殖行為や性欲の充足という目的にとどまらない何か重要なものを含むと、考えられるようになったことを意味するはずである。実際にこれまでのセクシュアリティ研究は、性や愛、親密な関係に関する従来の規範を再考し、その多様な実態を明らかにしてきた。この成果に学ぶならば、セックスワーカーと客の関係もまた、ただちにステレオタイプに従うわけにはいかない。すなわち、「買春者」が「性売買」に求めているものが単に「性欲の充足」だけであるはずがないと、ワーカーが与えるものが単に性的満足だけではないと、研究者ならば想定すべきなのである。少なくとも、「性欲」を「性的欲望」と言い換えて語り直すだけでも、見え方は大きく変わるはずである。

したがって本特集では、風俗店における客とキャストの出会いとはどのようなものなのか、「プレイ」では何が起きているのか、彼らはどのような思いで通っているのか、この点を掘り下げるインタビューを 2 本掲載した。これらは本特集のために新たに実施したのではなく、企画者である河原の別プロジェクトの過程で行ったインタビューであ

る¹。そのため2名とも、SMクラブで女性キャストとプレイするM男性という、「買春者」として典型的にイメージされる人々からはややはずれた存在となっている。しかしながら、そもそも典型的な「買春者」像自体が虚構を多く含んでいる点が問題であるし、1名はSMクラブ以外にファッションヘルスなど主流性風俗店の利用経験がある。企画者は、自身の経験に鑑みて、SMクラブの客とファッションヘルスの客に本質的な違いはないと考えている。

加えて、インタビューでは、インタビュアーはともに、SMプレイという行為を単に欲望の次元のみで捉えるのではなく、SMクラブという商業空間で実践されたものである点に特に留意して聞き取りを行っている。一読してもらえれば、彼らの経験はSMクラブというシステムなくしては存在しないが、だからといって他の様々な金銭を介さない出会いや経験に劣るものではないことがわかるだろう。したがって、これらのインタビューは本特集の趣旨によくかなうものであると考えている。自身の語りを「買春者」の語りとして掲載することを許可してくれたひじきとタカくんに、企画者として心から感謝を表したい。言うまでもないが、両名の語りの内容自体が相当に貴重なものを多く含んでいる点も、掲載に値すると考える理由である。

以上を通じて本特集は、日本の性産業とその客という、先入観を以てしばしば固定的に捉えられてきた存在への抑圧的な状況・まなざしについて、問題提起を行ないたい。

(河原梓水)

¹ 科研費採択課題(21K17987)およびサントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」2022年度年度採択課題「SM研究：支配と暴力をめぐる欲望の歴史・文化・実践」